【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	香川県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	土庄町立土庄小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	１	２	１	２	１２	１９
児童数	５２	４１	４４	３３	４１	３９	２	２５２	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

生きる力を育む学校教育の推進

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

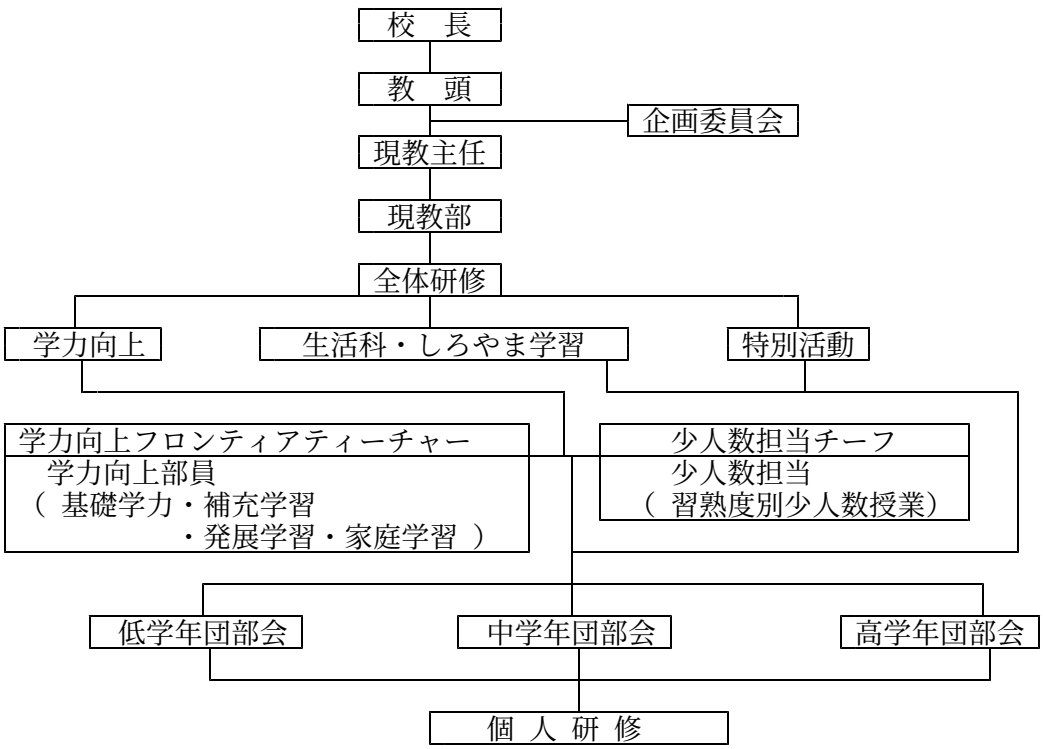
・１～６年生の算数，国語
　　児童の理解の状況に差が出やすい教科であるため。
・３～６年の理科
　　児童の課題に対応してグループ指導をするため。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 「確かな学力を身につけるための学習指導のあり方」 ○　研究の見通し 　複数教師が習熟度別少人数授業を行うことで，基礎・基本の定着のための方策を考えるようになる。その上，児童の関心・意欲や習熟度に応じた学習形態や指導方法，支援，評価などを工夫することで，児童は学習内容を確実に身につけ，学力を向上させていくことができるであろう。また，それを支える読み・書き・計算の力をしっかりと身につけさせる取り組みも，あわせて進めていく。 ○　研究の内容 ・習熟度別少人数授業の実践 ・基礎・基本の定着のための方策 ・評価の改善と教材開発 ○　研究の方法 　学力向上部を中心に，学力向上をめざした効果的な指導・支援の在り方と教材の開発を行い，習熟度別少人数授業を充実させる。また，基礎・基本の定着を図るための手立ての工夫や指導に生きる評価の在り方を授業研究や日々の実践の中で充実していく。

平成16年度	○　テーマ 「より確かな学力を身につけるための学習指導の工夫・改善」 ○　研究の見通し 　昨年度の実践をもとに，習熟度別少人数授業における評価の工夫・改善を進めるとともに，分かる授業を支える教材開発も継続して進める。読み・書き・計算の力をしっかりと身につけさせる取り組みについては，平成１５年度の成果と課題をもとに，個に応じたきめ細かな指導を進める。 ○　研究の内容 ・習熟度別少人数授業の実践 ・基礎・基本の定着のための方策 ・評価の改善と教材開発 ○　研究の方法 　学力向上部を中心に学力向上をめざした効果的な指導・支援の在り方と教材の開発を行い習熟度別少人数授業を充実させる。また，基礎・基本の定着を図るための手立ての工夫や指導に生きる評価の在り方を授業研究や日々の実践の中で充実していく。

(3)　研究推進体制



・　学力向上フロンティアスクールの指定を受け，学力向上に関しての組織を作っていった。
・　校内研修の組織の１部であるが，メンバーは，学力向上フロンティアティーチャー（現教主任とは別），教務主任，少人数担当主任等である。
・　ねらいは習熟度別少人数授業においての個々の学力の向上やスキル学習等による基礎・基本の徹底である。
・　学力向上フロンティアティーチャーは全体の中で協力できるような組織を作り，より効果的なものになるよう話し合いの機会を設定している。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

〇基礎・基本の定着のための方策

・　読み・書き・計算の力を高めるために漢字計算ドリル・漢字計算テスト・漢字進級テスト・百ます計算・読書活動を実施した結果，集中力が高まった。

・　漢字計算ドリルでは，ほとんどの児童が，黙って集中して取り組めている。

・　漢字計算テストでは，基礎的な問題にチャレンジすることで，基礎・基本の定着に大いに役立っている。

・　平成１５年度学力状況調査での国語科における「書く能力」では，正答率が県平均を 11.5 %上回っていた。

・　漢字進級テストでは，「とめ」，「はね」，「はらい」に気を付けて，ていねいに書くことを大切にしているので，正確に書く態度が身に付いてきた。

・　百ます計算では，継続することで正確に速く計算できるようになってきている。また，意欲的に集中して取り組めている。

・　読書活動では，読書を好む児童が増えてきた。

〇少人数授業の実践

・　普段の授業では発言の苦手な児童が，自分に適したコースで学ぶことにより，積極的に自分の意見を述べることができるようになった。

・　習熟度の低い児童に対して教材の工夫や個別指導を行うことで，学習内容を理解できるようになった。

・　進度をそろえることによって，コース間の移動を可能にしたことで，児童が自分に適したコースを何度でも選択し直すことができる形がとれた。自己評価カードで本時の学習をふり返ったり，教師の適切な助言により，児童の自己評価力が高まった。

・　学習の導入段階で，児童がコースの説明を詳しく聞くことで，見通しをもって学習に取り組むことができるようになった。

・　少人数担当の教師をどのように活用するか（Ｔ・Ｔ，習熟度のコースを担当する，課題別のコースを担当する）を研究することができた。

・　評価規準を定めているので，どのコースを担当した教師も，児童に身につけさせたい最低限の基礎・基本が明確になり，押さえるべき学習内容を確認しながら授業をすることができ，遅れがちな児童の指導にも役立った。（放課後や休み時間の指導）

・　単元に応じて，習熟度別少人数授業を単元のどの位置にもってくると効果的であるかを教師が見極められるようになってきた。例えば，初めて出てくる内容の単元は，基礎・基本の部分は一斉（Ｔ・Ｔ）で行い，応用・発展の部分を習熟度別に分ける。また，下学年からの積み上げの多い単元については，プレテストを行い，始めから習熟度別少人数授業を行った。

・　児童の自己評価カードを作成することで，児童に学習をふり返らせたり，学習の見通しをもたせたりすることができた。そのことで，児童の自己評価力が高まり，習熟度別のコース選択が適切に行えるようになった。

・　校内における研究授業や公開授業において，算数の教材を児童の習熟度に応じて，いくつか工夫して開発することができた。また，香川型教材モニター校として，香川型教材を授業に生かすことができた。

２．今後の課題

○基礎・基本の定着のための方策
・　漢字計算テスト，漢字進級テスト，読書活動については，保護者の理解も得られ，協力体制ができているが，その他のものについては，さらに効果を上げるためにも保護者の理解が得られるように工夫が必要である。
・　漢字進級テストでは，自主的に学ぶことを目標にしているが，なかなか進級できず何度も同じ級を受けていても気にならないで，繰り返し同じ級のテストを受けている児童もいる。いかに前向きな意識をもたせるかが課題である。
・　百ます計算では，効果を上げるために継続的に実施したいが，時間の確保が難しい。継続するためには，百ます計算の時間を設定する必要がある。
○少人数授業の実践
・　担当者の打ち合わせの時間の確保が難しい。
・　少人数授業を行うための教室の環境（机の高さ，離れた場所）の違いがありすぎる。
・　それぞれのコースの評価が，同じ規準で行わなければならないのだが，毎時間そろえて評価していくのは，現実的に難しい。テストの結果やワークシート等表現物による評価が中心になりがちである。
・　国語，理科におけるさらなる習熟度別少人数授業の工夫・改善が必要である。
・　自己評価をより確かなものにするとともに，相互評価が必要である。たとえば，教師が，一人で全員にコメントするのは難しいので，児童間でコメントし合うような相互評価の形も考えられる。
・　教材開発したものを学校として，どのように積み重ねて今後に生かしていくか工夫が必要である。
・　グループを分ける際に，児童が自分に適したコースを選択できる力をさらに身につける手立ての工夫が必要である。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○平成１５年度県学習状況調査（１学期実施）結果の考察（国語，算数，理科）
　今年度実施した県学習状況調査の結果を考察することで，本校の児童の実態を的確に把握して，それを２，３学期の学習指導に生かす。

○漢字計算テスト（月末）
　毎月実施した漢字計算テストの結果を考察することで，基礎学力（漢字計算力）の定着度を把握し，個別指導に生かす。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○第１回小豆地区協議会
・実践発表
　８月５日（火）午後　小豆合同庁舎（小豆地区協議会委員）

○少人数授業の公開実施
・香川県小学校研究会算数部会小豆支部における研究授業
　５月３０日（金）午後　土庄小学校（香小研小豆支部算数部会員）
・学習参観日
　１１月１７日（月）全日　土庄小学校（土庄小保護者，学校評議員）

○第２回小豆地区協議会
・授業公開及び１年次中間報告
　２月２４日（火）午後　土庄小学校
　（小豆地区協議会委員，小豆郡内各小中学校教員等１名）

○ホームページによる公開（http://www.niji.jp/school/tonosho/）

○１年次の研究のまとめの作成と配布（小豆郡内各小中学校全教員）

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　□ ６学級以下　■ ７～１２学級
□ １３～１８学級　□ １９～２４学級
□ ２５学級以上

【指導体制】　■ 少人数指導　□ Ｔ．Ｔによる指導
□ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　■ 国語　□ 社会　■ 算数　■ 理科
□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭
□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■ 有　□ 無